インタビュー 森田 隆 氏（被爆柿の木オーナー）

インタビュー風景
（写真左：宮島達男、右：森田隆氏）

2019年6月2日　森田邸にて
インタビュアー：宮島達男

宮島　原爆のことは覚えていらっしゃいますか？

森田　原爆が投下された時、私は長崎にいませんでした。父が東京で町工場をやっていて、当時は私も東京にいました。戦争がひどくなった昭和20年4月に、工場は山梨に疎開しました。

宮島　お父様は、どんなお仕事をなさっていたんですか

森田　鉄工所関係です。オリンパスの精密機械を作っていました。戦車の照準を決める部品などを作っていたようです。でも工場は戦争中に仕事がなくなっていき、父は「このままでは生きていけない、百姓でもしないと食べていけない」と思い、実家のある長崎に帰ったのです。昭和21年のことです。当時私は小学3年生で、東京から秋田に疎開していましたが、栄養失調になっていました。

宮島　それでお父様は、今のこの家にお引越しされたんですか？

森田　この家は父の本家で、父の兄、私の伯父が住んでいました。父は長崎に引き上げた後、開拓団に入り、飯盛岳で開拓の仕事を始めました。ところが母が田舎育ちではなかったため開拓団の仕事になじめず、山での生活が難しかったようです。そこで山から長崎市内へ引越し、家を建てました。昭和60年まで、ここから近くの、その家に住んでいました。

宮島　それでは、森田さんがこの家にお住まいになるのは、その後になるわけですか？

森田　いえ、私は伯父の家の跡取りになったのです。私の兄は、田舎が嫌だと言って東京でサラリーマンになりました。本当は、私も兄と一緒に東京に行くはずだったんです。でも兄は学校を出ていたけれど私は学歴がないので、東京では生活がしにくいだろうということになり、長崎に残りました。伯父には子どもがいませんでしたから、私は伯父の家の跡取りになりました。伯父が郵便局に勤務していたので、私もその縁で、郵便局で準公務員として働きました。

宮島　長崎に住み始めた当時、伯父さんの家にあった柿の木のことは覚えていますか？

森田　柿の木のことは覚えています。私が長崎に来た頃には、もう柿の木はあって、実も採れていました。ただ、とても小さな実で、子ども達はみんな食べたけれど、大人は誰も見向きもしなかった。当時、柿の木はとても丈夫で元気で、枝をいっぱい張っていました。ところが、昭和37年に家の前に道路ができて、この道路のおかげですっかり柿の木が弱ってしまったんです。だから、原爆よりも都市化の波にやられたように思います。

宮島　伯父さんから柿の木の話を聞いたことはありますか？

森田　この柿の木は雑木林の中にあったのですが、原爆で雑木林はやられ、柿の木だけが残ったと聞いています。原爆が落ちた時、大きな2本の幹が立っていたという話です。この柿の木のことを知っている近所の人に話を聞いたことがありますが、その人は、原爆の時にこの柿の木の下を通って避難したと言っていました。

宮島　柿の木を治療しようと思われたきっかけは何ですか？

森田　この木の近くには畑があって、井戸もありました。井戸は畑のためのものだったんですが、昭和35年に長崎で渇水があった時には、人々に良い水を供給することができました。でもこれも、その後「危ないから埋めろ」といわれて埋めました。昭和37年にここに道路が通ったとき、緊急車両が通れないからと、消防団が来て枝を切ってしまいました。全体の3分の2切ったんですが、そのとき、初めて柿の木を上から見たんです。それで、柿の幹の中に空洞があることが分かりました。上からみるまで、空洞に気がつかなかったんです。

宮島　それですぐに、治療を始められたんですか？

森田　私がこの家に住み始めたのは平成2年で、平成7年までの5年間に家の前に駐車場を作りました。その時は、かなり大きな根を切らなければなりませんでした。ずっと生き延びてきた柿の木の、太い根を切ることに少し逡巡したことを覚えています。平成5年頃から、長崎市がこのような木を残していこうと動き始めました。中が空洞になっているのを見た市役所の人に「この木は残せ」と言われました。それで、海老沼先生に治療をお願いしたんです。

宮島　現在、この柿の木からとれた苗木が世界中にわたり、色々な国や地域の子どもたちが植樹をし、育ててくれています。子ども達に、何かメッセージはありますか？

森田　この柿の木を海老沼先生に治療していただいた当時、樹齢250年と言われました。そこから25年経っているので、今は275歳。とても生命力の強い木だと思います。一時は誰からも見向きもされなかった木が、今、世界中で子ども達に平和の意味を伝えていることを、うれしく誇らしく思っています。

私も自分の思いを書き残しておこうと思っていましたが、病気になってしまい果たせません。私の代わりに、柿の木が、平和のメッセージを伝え続けてくれることを期待します。

この先、柿の木を守っていく人がいるかどうか心配ですが、世界中に広がったこの木の子ども達が、ずっと生き続けてくれることに感謝しています。ありがとうございます。

森田邸の被爆柿の木

● もりたたかし

1935年4月8日生まれ。長崎市若竹町に住み、被爆柿の木のオーナーとして、樹木医・海老沼正幸氏に治療を依頼。これが縁となり、海老沼氏の求めに応じて1998年より「時の蘇生・柿の木プロジェクト」への、柿の実の提供を続けていた。2023年6月3日逝去。

森田さんのこと

時の蘇生・柿の木プロジェクト事務局 宮島依子

森田さんとの出会い

1995年に柿の木プロジェクトを立ち上げ、長崎の海老沼先生が被爆柿の木から生み出した2世の苗木を、毎年送っていただくようになりました。海老沼先生は樹木医として、長崎市内の何本もの被爆樹木を治療されています。被爆樹木には、柿の木が多いそうです。そうして治療を受けた被爆柿の木は、たくさんの実がなるほど元気になりました。海老沼先生はその実を木のオーナーさんから分けていただき、それをご自身の農園に植え、苗木に育てられました。長崎を訪れる修学旅行生たちに、平和への願いを込めて被爆柿の木2世の苗木を配る活動をなさっていることを、宮島達男が知りお手伝いを申し出たことから、「時の蘇生・柿の木プロジェクト」はスタートしました。

柿の親木から実を採って苗木にするところは海老沼先生が実施してくださり、毎年、植樹に必要な本数を送ってくださいます。森田隆さんのお家の柿の木から採れた種を、柿の木プロジェクトで使い始めたのは、1998年のことです。オーナーさんとのやり取りは海老沼先生の奥様の順子さんが担ってくれているので、事務局の私が、直接森田さんとお話をする機会は、そんなにたくさんはありませんでした。それでも、何度かお宅に伺って、ご挨拶したり、柿の木をめぐるお話を聞いたりしました。被爆当時のことを親御さんから聞いて覚えているご近所の方が、同席してくださることもありました。2018年にイタリアの植樹地から24人もの人たちが、ツアーを組んではるばる日本にやって来て、旅の第一目的地である長崎に行ったときは、当然、親木と森田さんに会いたいと言うので、お家に寄せていただきました。柿の木を愛してやまない大勢のイタリア人と、話したり一緒に写真を撮ったり、楽しそうにしていらした森田さんの姿を覚えています。

イタリアの植樹地の人々が森田邸を訪れた
（写真手前が森田氏）

森田さんへのインタビュー

そんな訳で、森田さんのお宅へは何度か伺い、色々なお話もさせていただいていましたが、「そう言えば、まとまった形でお話を伺ったことがない」ということに気づき、2019年6月にカメラを回しながらお話いただく機会を設けました。森田さんが長崎で暮らすことになったいきさつや、戦後の長崎の街についてなど、それまで知らなかったお話をお聞きすることができた貴重な場となりました。

その半年後には世の中はコロナ禍に入り、飛行機に乗って行き来したり、人と会って話をしたりすることが難しくなりましたので、このタイミングでインタビューをさせていただけてよかったと思っています。

ただ、この時には森田さんは酸素チューブを装着されていて、あまりお加減が良くないようにもお見受けし、少し心配になりました。

電話をいただき、訪問の約束をする

2023年4月下旬、森田さんから事務局に電話がありました。森田さんが事務局に、ご自分で電話をかけていらしたのは、これが初めてです。普段はこちらがお願いすることばかりなので、事務局から電話をしていました。

森田さんの第一声が「大変なことになりました！！！」だったので、私も驚いて聞き返しました。「森田さん、どうされましたか？」すると森田さんが「柿の木の下に、女人が寝ておりまする」と言うのです。「どんな方ですか？」と私。「とにかく寝ていて、口で説明するのは難しいので、とにかく一度こちらに来て、柿の木を見てほしい。もしかしたら、今まで通りにプロジェクトを続けていくことは、もうできないかもしれません」と、森田さん。

お薬か何かを飲まれて少し混乱されているのかな？と思いながら、私は答えます。「わかりました。ちょうど6月に海老沼先生とお会いするので、長崎に行くことになっています。その時に、森田さんのところに寄らせていただいてもいいですか？」

こうして、6月4日の午前中に伺う約束をしました。電話だけでは紛れてしまうかもしれないと思い、翌日に、確認のお手紙も送りました。

お別れと引き合わせ

6月4日午前10時半。宮島と私と実行委員の合計4名で森田さんのお宅へ。被爆柿の木の根元に女の人が寝ていないことをみんなで確かめながら、急な階段を登って玄関の呼び鈴を押します。しかし、何度か押しても反応がなく、もしかして忘れてしまわれたのかも？と思い始めた頃、奥様の邦子さんが、玄関を小さく開けてくださいました。「宮島です。今日、森田さんとお約束をしていたんですが」と告げかけると、邦子さんも覚えていてくださったのか「あっ、今日でしたか？」と。そして、「実は昨日、主人が亡くなりまして」とおっしゃいました。「え？」

邦子さんはパジャマ姿。息子さんに「通夜まで時間があるから、お母さんは家で休んでいて」と言われ一旦自宅に戻られたところで、今は葬儀用のバッグを探していたとおっしゃいました。私たちは、大変な時に押しかけてしまったことに慌てながら、葬儀の場所だけ伺って早々に失礼しました。そして、東京に戻る日なので時間的にお式に列席はできないけれど、せめてお花をお贈りしようということになり、葬儀場に向かいました。

葬儀場でお花を手配していると、スタッフの方が「ご家族はご遺体と一緒に控室にいらっしゃいます。お会いになれると思いますよ」と、控室まで案内してくださったのです。そこで、森田さんの息子さん・お嬢さんとお話をすることができました。それから、森田さんにも、最期のお別れをすることができました。

実は長年、事務局として少し心配していたことがありました。それは、森田さんのご家族が、柿の木プロジェクトについてどのように考えていらっしゃるのか分からない、ということです。
森田さんと奥様とはお宅にお邪魔する際にお目にかかってお話をしていますし、海老沼先生との繋がりもあるので、もちろん柿の木プロジェクトのことはよくご理解くださっていますし、とても協力的に関わってくださっています。ただ、そのことが、息子さんやお嬢さんに伝わっているかどうかはわかりません。直接ご挨拶をしたこともないので、もしかしたら私たちを、ご両親につけ込む訝しい者とお考えなのではないか？森田さんのお宅からは、今でも毎年、柿の実をご提供いただいていますが、それも本意ではなく、機会があれば打ち切りたいと考えていらっしゃるかもしれない…。そんな懸念を抱いていたのでした。

初めてお会いした息子さんは、「父がお世話になりました。父は“柿の木プロジェクトに関われて嬉しい。張り合いになる”と言っていたので、家族としてもありがたく思っていました」とおっしゃいました。息子さんは今、大阪でお仕事をされているとのことでしたが、名刺をくださり、「柿の実は、これからも取っていただいて構いませんし、もしこの後、柿の木のことで何か相談があれば、いつでも連絡してください」と言ってくださいました。お嬢さんも、「父は、柿の木プロジェクトのことをとても誇らしく語っていたし、お手伝いできることを楽しみにしていましたよ」と言ってくださいました。私は長年の疑心が消えたことに安堵し、感謝の気持ちで、静かな笑顔で横たわる森田さんにお別れを告げました。

葬儀場を出てから、同行のみんなで話しました。もし4月に森田さんから電話がなかったら、今回の長崎訪問で森田

さん宅にお寄りすることはなかったでしょう。電話をいただいてお会いする約束をしていたとしても、もし日にちが前か後ろに1日ズレていたら、また約束の時間が2時間でも違っていたら、訪問してもお留守なまま、私たちは事情を知ることもなく帰京し、息子さんとお会いすることもなかったでしょう。これを考えると、森田さんが私たちを呼んでくれたとしか思えないのです。森田さんはご自身の死を予感し、私に電話をかけて私たちを呼び、息子さんに引き合わせてくれました。まるで、柿の木のことを息子さんに引き継ぐかのように。自分がこの世からいなくなっても、被爆柿の木の思いがずっと続いていくことを願って。

ここにも、柿の木がつないでくれた大切なご縁がありました。
改めて森田さんへのお礼の気持ちとともに、ご冥福をお祈りします。ありがとうございました。どうぞ安らかに。

長崎を訪れた実行委員の質問に答える森田氏

冬の森田邸の被爆柿の木（いずれも2013年12月）